

---

**魔法少女リリカルなのは      ~ 転生者は蛇遣い~**

Mr.BLUE

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

魔法少女リリカルなのは 転生者は蛇遣い

### 【Nコード】

N4881X

### 【作者名】

Mr. BLUE

### 【あらすじ】

邪神に殺された少年が能力を貰って「魔法少女リリカルなのは」の世界で無双する話。序盤は原作キャラがほとんど出ません。(亀更新&駄文。おそらく期待するだけ無駄。独自設定、独自解釈あり。それでもOKと言う方はどうぞ。)

## プロローグ（前書き）

見切り発車万歳。なんとか終わらせられようと頑張る。

## ブローグ

### ブローグ

ここは日本にとある町、海鳴市。地名にもある通り海に隣接しているが山もあれば丘もある。更には温泉宿などもあり、中々に豪華な町である。そしてその町の一角に喫茶店ある。

喫茶店の名前は『Blast of Wind』

直訳では『疾風』である。街中にひっそりと佇むこの店は有名ではないが常連が多い店であり皆、その絶品のコーヒーを求め、通うのである。内装が目立った所はなく、普通のテーブルに普通の椅子、普通のカウンターだが一つだけ珍しいモノがある。それは壁紙にデザインされた「風」の絵である。様々色彩で描かれたそれは明確なイメージを持たせることのない「風」として、常連の客に認識されていた。

カウンターの奥でせつせとコーヒーカップを拭いているのは「王  
童虎 ワン ドウコ」

喫茶店だと言うのに黒いスーツを着込み、その黒い髪をオールバックにし銀縁の眼鏡をかけており、アジア系の顔はどこかに理知的な印象を与える。どこにいるサラリーマンだ、と言う服だ。正直言ってこの格好を見て喫茶店のマスターだと思う人は本当に少ない。

そしてそれを見ながらカウンターで煙草を燻らせている子供がいる。

年のころは小学一年に届くか届かないくらい。髪は真っ直ぐに伸ばしており黒い髪を一纏めにして後ろに垂らしている。服装はYシヤツにジーンズと言った普通の格好だった。顔自体はどこか悪戯小僧を彷彿とさせるような顔をしているが、どこことなく外来のモノを感じる顔立ちだった。

「マスター。本当に依頼とか来てないのか？」

ダレたように童虎に話しかける子供は机にべったりと頬をつけ全身で倦怠感を表していた。煙草は右手から灰皿に置き手をダラーンとさせていた。

「何度も言っている。ない」

「は〜。。。そっか」

その問いに童虎は迷うふりすら見せず答える。それを聞いた子供はため息を吐きながら更にその体を沈ませた。

「。。。」

「。。。 (フキフキ)」

「。。。」

「。。。 (フキフキ)」

しばらく無言の空間が続く。童虎は新たなカップを手に取り子供は新たな煙草を手に取っていた。しばらくして何も音がない空間に飽きたのか子供がまた童虎に話しかける。

「なあマスター。本当に何も無いのか？」

「ない。・・・あ、あった」

「本当か！」

バンツとカウンターを叩き飛び起きる子供に童虎は無言で咎めるような目を向けた。向け続けた。・・・次第に、子供は冷や汗をかき始めた。ダラダラと流れていく汗は額から顎を伝い地面に落ちていく。その中の一滴がカウンターにつけていたに落ちる感触が子供に伝わった瞬間、子供は頭を下げていた。

「・・・ごめんなさい」

「よろしい。少し待つ。今取ってくる」

「・・・はあ」

そういつてカップにコーヒーを注ぎ子供の前に置いた童虎は店の奥に向かった。童虎を見送った子供はドサツと音を立て椅子に座り一気に脱力した。それだけ童虎の視線には耐えがたいものがあった。

「ああ・・・コーヒーうま」

しばらくして出されたコーヒーを飲んだ子供は一言、そう漏らす。恍惚とした顔からは中毒なことが容易に想像できた。

「はい。これ」

コーヒーを呑みながら幸福に浸っていた子供だが、童虎が手に幾つかに束ねられた紙束を戻つてくるとその顔を引き締めた。

「どうも。なになに……。依頼人は月村 忍。ん？月村？」

その紙束を読み進めていた子供だが依頼人の名前を目に写したとき疑問の声をあげた。

「なあ、マスター。この家、もしかして海鳴にあるあの豪邸か？」

「そう」

「ふん。意外と、つてかすぐ近くだな」

そう言つて気楽に笑つた子供は「御馳走様。今日もうまかつた、マスター」と言つた後カウンター席から飛び降り店の扉に向かつて歩き出した。そして扉を開け出ていこうと子供が思った瞬間に童虎から声がかけられた。

「飛鳥。月村は吸血鬼。良く言われる。気を付ける」

「へー、吸血鬼。ん、分かつた。気を付けとく」

唐突にかけられた言葉に瞳を瞬かせた飛鳥だが少し皮肉げに笑つたがそのあと元の悪戯小僧の様な顔に戻り扉を開く。カランカランと扉にくくりつけたベルが鳴つたと同時にその姿は喫茶店の中から欠き消えていた。

「さてと。じゃ、Get Backers - 奪還屋 - の仕事、始めますか」

そう言って、飛鳥は走りだした。海鳴市有数の豪邸を構える、月村の家に。

彼の名前は「飛鳥・E・アインス」。Get Backers - 奪還屋 - を営む、今年小学生になる、『転生者』である。

## プロローグ（後書き）

うっわ、駄文。

感想ご指摘待ってます。

## 第一話（前書き）

完結できるんだろうか・・・？  
修正しました。

## 第一話

### 第一話

『飛鳥・E・アインズ』は『転生者』である。いつの間にか死んでおり例の如く真っ白な空間でテンプレ的に能力を貰いマニュアル通り穴に落とされ新たな世界に産声を上げた。

そして紆余曲折あつて日本の某県の海鳴市で「Get Backers - 奪還屋 -」なる、仕事を始めたのだ。若干五歳と言つ年齢でだ。突つ込まないで上げて。

飛鳥が貰つたのは漫画「Get Backers - 奪還屋 -」の「美堂 蛮」のステータス。つまりその身体能力と邪眼、悪魔の腕である。・・・え、実力？そりやもう折り紙つきだよ？なんたつて能力を選んだ瞬間に神様の御好意により漫画「Get Backers - 奪還屋 -」の最強キャラの一角である「赤屍 蔵人」による地獄のトレーニングが幕を上げたから。あれだよ、飛鳥だつて最初は心底ブルつてたよ？だけどあれだよ。殺気なんかにビビつてたら一生終わらない訓練だもの。五日動けず、十日でようやく動き始め、二十日でようやく赤屍に向かつていった。すぐに斬り殺されたけど。死なないものね、神様のおかげで。だから思う存分戦つて、殺されて、生き返つて。究極の実戦勉強の中で培われた経験はしっかりと残っている。実際、飛鳥は前に一度、本物の殺し屋さんの殺気を浴びたことがあるが、毛ほども脅威を感じなかった。軽々と受け流したくらいである。

要するに「飛鳥・E・アインス」の実力は人として届き得ぬ領域にある、ということがわかれば万事OKなのである。

A c t 月村の屋敷前

飛鳥は今、依頼にあつた月村の屋敷の前にいた。屋敷の前には門が高々とそびえたち、何となく屋敷の前に立つ者に居心地の悪さを与えるものがある。・・・のだが、飛鳥の耳には気の抜けるおとが絶えず中から聞こえた。即ち、猫の鳴き声である。ニャーニャーニャーと沢山の鳴き声が聞こえてくる。一体どれくらいいるのだろうか？そう、思ってしまうほどの飛鳥の並はずれた聴覚は沢山の猫の鳴き声を捉えていた。

「・・・気にせず行くか。ん、チャイムは・・・これだな」

ピンポーン

「・・・はい、どちら様ですか？」

飛鳥がチャイムを鳴らすと少しして落ち着いた女性の声が聞こえてくる。飛鳥はその声に物怖じせず至って普通に答えた。

「え〜。依頼を受けた「Get Backers - 奪還屋 -」です。依頼の確認に来ました〜」

「・・・はい、少々お待ち下さい」

玄関先でしかも声を潜めることもなく、勿論周りに人がいないことを飛鳥は確認しているが、それでもその態度に対して不快な物を感じたのか、少し声の不機嫌になったインターフォンの女性のにあ〜、またやつちまったか、と思った飛鳥は頭を掻きながら嘆息した。飛鳥としては基本的に依頼を確認しに行くと子供の容姿なのでどうしても嘗められるので常用的に汚い言葉を使っているのだが、それが相手を不快にさせてしまうこともよくあった。

「この口調やめた方がいいのか・・・?」

ポツリと呟く飛鳥だったがそれは何か大きな駆動音に遮られた。

ウィイーーン・・・

飛鳥の前の門が開いていく。その光景を見た飛鳥は一言。

「金がかかってんな〜。さすがは海鳴一の資産家ってところか・・・  
・ところでこれ、入っていいってことだ〜な?」

どことなくずれた発言をしたあと、少し逡巡し結局気にしないことにしたのかスタスタと門を踏み越え、こちらも大きい玄関の扉に向かっていった。

月村家の当主、月村 忍は客に対応する応接室で傍らに二人のメイドと恋人である高町 恭也を置き玄関前の監視カメラから送られてくる映像を注視していた。今回、依頼をするのは不本意であったが今回の件はある程度の裏に通ずる月村の力を持ってしても解決できるかどうか定かではなく。更に腕が立つ恋人や知り合いがいるが本物の殺し合いの最中に送るには心配だ。故に蛇の道は蛇と言うことで、そこそこ裏で名が知れている「Get Backers - 奪還屋」なる者に依頼をしようと思ったのだが。

「・・・何？この子、すずかより少し年上にしか見えないじゃない。もしかして遣いか何かかしら？」

「・・・そうかも知れない。さすがにこの年で、と言うことはないだろうが・・・。一応、警戒はして置くよ」

「うん。お願いね、恭也。ノエル、ファリン。貴方達も」

「畏まりました。ではファリン、私はお嬢様のお傍で警護の当たるので出迎えの準備をして下さい」

「は、はい」

表から入ってきた思わぬほど小さい子供に眉をひそめたが、すぐにその顔をやめ他の三人に声をかけ始めた。彼女の妹である、すずかは今日は外出させており心配はいらない。しかし

(この、子供。本当に遣いか何かだったら失礼な人ね……。自分で来ないで信用も何もあつたもんじゃないでしょう)

交渉に本人ではない人間が来るなど依頼をする側に対して失礼ではないだろうかと、「Get Backers - 奪還屋 -」が飛鳥だと露にも思わず、憤っていた。その様子を傍らで見ながら恭也は静かに警戒を深めていた。カメラから見える映像には依然として出迎えたファリンにここまで案内されている飛鳥が映っているが

(隙が全くない……。親父でもこうはいかないぞ……)

その体勢に隙がまったくないことや悠然と醸し出すその歴戦の空気を漠然とした勘で感じ取っていた。だが、それを忍に知らせることはしなかった。忍には交渉に集中して欲しいし、無闇に警戒を深めることはないだろう、そう恭也は思っていた。それに

(まだ当主になつたばかりなんだ。危険が迫つたらオレが守つてやるぞ)

こうゆう時に守つてやれなくて幼少のころから鍛えてきたのはなんだったんだ。今まで鍛え磨いてきた武技はそう簡単には破れない領域に達しているだろう確信が恭也にはあつた。それはノエルも同じだった。

だが、二人はこの見通しがとつてもなく甘かつたことを後に思い知ることになる。

玄関の扉をあけると同時にメイド服を着たファリンに出迎えを受けた飛鳥は客間に案内すると言う言に従い、ファリンのあとを追って行きながらも屋敷の中を観察していた。

(ここに来るまで確認できた監視カメラが五台。もしかしたらもつとあるかもな)

随分警戒されてるもんだなあ、と嘆息した飛鳥は案内された客間の扉を開けた。

そこには優雅にカップをすする忍と傍に控えるノエル、その逆隣りには飛鳥をを鋭い視線で睨んでいる恭也がいた。扉が開くと同時に飛鳥に気づいたのか忍は優雅に微笑み・・・地雷を踏んだ。

「始めまして。」「Get Backers - 奪還屋 -」の遣いさん。  
私は月村 忍。月村家の当主で今回の件の依頼人よ」

始めの一言でピキツと言う音がしたのだが忍はそれに気づかず案内されるがままに座る飛鳥に、肯定の意を感じたのかそのまま喋り続けた。・・・静かに少しずつ、だが確実に怒気が飛鳥から溢れ出ていた。

「それで、貴方のお名前は？」

につこりと笑い子供に(事実子供なのだが)聞くように飛鳥に問う。だが、飛鳥は黙りこくって何も発さない。それを怪訝に思ったノエ

ルと恭也だったがそれに気づく様子もなく忍は続ける。

「……」

「それにしても……」「Get Backers - 奪還屋 -」ってこんな子供を使いに出すような所なのかしら？何か酷いことでもされてるの？」

忍の頭には飛鳥自身が「Get Backers - 奪還屋 -」と言う可能性は頭から排除しているのか、子供を相手にするような態度を崩さない。そして度重なる勘違いにさすがに憤りを感じたのか、飛鳥はテーブルを思い切り叩き、立ちあがった。驚いた恭也が腰を浮かせる中飛鳥は叫んだ。

「……（プチッ）遣いじゃねえ！オレが依頼を受けた「Get Backers - 奪還屋 -」だ！」

叫んですつきりしたのか飛鳥はふーと息を吐き椅子に座りなおした。それに一先ず警戒を緩めたのか、ノエルと恭也も戦闘態勢を解除する。だが客間の中でただ一人驚いている人間がいた。

「……えっ。……本当に？」

忍である。目を見開き手で口を覆い静かに驚いていた。

「本当に」

「えっ……と、失礼しました？」

「うむ」

思わず謝る忍に飛鳥は鷹揚に頷き返した。

先程の魂の絶叫から数分。ファリンが持ってきた紅茶を飲み気を取りなおして飛鳥と忍は依頼の確認に入っていた。

「では改めて、私の名前は「Get Backers - 奪還屋 -」のエリオとお呼び下さい」

「エリオく……さんね。じゃあこつちも。私の隣に居るのがメイドのノエル。逆の方は高町 恭也。まあ、ボディガードの様なものかしら」

飛鳥は自己紹介もそこそこに依頼の確認を始めた。ちなみにエリオとは「飛鳥・E・アインズ」<sup>エリオット</sup>の引用である。

「それで今回の依頼の品はなんですか？依頼書に書いてなかったことは言いくいこと、または、聞かれたくないことでしょう」

「ええ、そうなんだけど……別に畏まらなくてもいいわよ？」

「そうですか。では失礼して……。で、結局なんだ？オレとしてもブツが何か分からなきゃ何を準備すればいいのかわかんねえ」

「そうね……」

許しを得た途端にえらく不遜な態度にノエルは思わず顔をしかめたが忍は気にしなかったようなので何も言わない。忍は少し迷ったあとポツポツと語りだした。出来れば黙秘しておきたいことなのだが今回の事はこれを言わなければ始まらないのだ。

「貴方は吸血鬼、って信じるかしら？」

その問いに眉を潜めた飛鳥だったが忍の問いがふざけているのではないと分かったのか、真面目に回答した。

「・・・まあ、信じるか、信じないかでいえば・・・信じる、だな」

「そう・・・」

答えた飛鳥に忍は一瞬疑う様子を見せるがすぐに続きを話しだした。

「・・・私たち、月村の一族は「夜の一族」。吸血鬼の血を引いています」

唐突なカミングアウトに飛鳥は反応を示さず黙して続きを促す。

「続けるわよ？・・・月村の家系は不本意だけど吸血鬼の血を引いている。だから私たちは人間に戻る、いや成る、と言うのかしら。そのためにお金をお沁みなく使って研究していました。・・・「夜の一族」と言われる由縁の「吸血鬼の血液を」」

「しかし先日。その研究所に侵入者が入りました。その人物によって「吸血鬼の血液」は盗まれ、今日から五日後近くの湾から密輸船に乗せられ海外に持ちだされるようです」

「今回の依頼は「吸血鬼の血液」の奪還。そして出来るならばその組織の情報。勿論、情報については買い取りします」

言いたいことは全て言った忍は紅茶で喉を潤し、飛鳥の返事を待った。・・・と言っても受けさせないと言う選択肢は忍の側にはないのだが。

対して飛鳥は依頼の内容について費用、危険度、情報の虚実、その他諸々から吟味し、最終的な結論を約一分後に口にした。

「断る。情報が不鮮明すぎる。その組織が巨大ならばオレの周りにも危害が及び可能性がある。残念だが他を当たってくれ」

そう言って紅茶を飲みほし席を立つ飛鳥。真っ直ぐに扉に向かう飛鳥だが唐突に歩みを止めた。いや、止めざるを得なかった。なぜならば微塵も隠す気がない闘気が飛鳥に向かって放たれていたからである。

「そう・・・。でもこっちははいそうですか、とはいかないのよ」

忍が言葉を発した瞬間、その両隣の人影が欠き消えた。

月村家に仕えるメイドのノエルは戦国時代の侍女の様に武術を嗜んでいる。と言ってもそれは嗜むと言う領域ではなく既に一流の域に

おり、恭也とて恭也の師であり父親でもある高町 士郎から古武術「永全不動八門一派・御神真刀流小太刀二刀術」の指導を受ける猛者である。

両者は忍の声がかかった瞬間飛鳥に向かって走りだした。その速度は既に常人には捉えきれない速度に入っており忍から見ても二人は飛鳥の前に瞬間移動したようにしか見えなかった。

ノエルは懐に忍ばせていたナイフを取り出し飛鳥の首を刈らんとその凶刃を振りかぶり、恭也は自らの流派の奥義であり神速を持つて飛鳥に接近、椅子の下に置いていた小太刀二刀を上から振りかぶっていた。

殺<sup>と</sup>った　　！

ノエルと恭也はどちらとも得物を振りかぶった瞬間そう思っていた。だが二人の確信はすぐに驚愕へと変わる。

飛鳥はまず、二人にも知覚できない速度で恭也を蹴り飛ばす。その蹴りをなんとか腕で防ぎ吹き飛ばされた恭也は信じられないと言う目で飛鳥を見る。だが、その間にもノエルの凶刃が飛鳥の首に迫る。

（もう、止められない・・・！）

恭也とノエル、二人とも少し物騒なことを考えていたが実際に飛鳥を殺す気はなく寸前の所で止める気だった。だが、ノエルは恭也が蹴り飛ばされたことに驚き既にそのナイフを止められるポイントを

過ぎていた。

だが、飛鳥はいとも簡単にその危機を脱した。自らの首の迫っていたナイフを右手の五本の指の腹、そこで全て掴むとそのままナイフを指の力だけで砕き伸ばされたノエルの腕を掴むを思いきり床に投げつけた。

カハツ、と背中から地面にたたきつけられ苦悶に身を擦らすノエル。恭也はそれを見てより一層警戒を深め神速を発動、思考を最大限加速しながら飛鳥の周りを自身が持ちうる最高の速度で旋回し始めた。欠き消えた恭也を見て飛鳥はため息を一つ吐いた。別にこの程度の速度、飛鳥にとってさして脅威でもないしスピード勝負を選んだって良いのだがそれは疲れる、と言うことで飛鳥は違う手段をとった。

「いくらスピードが早くてもそれが必ず強さに繋がるわけじゃねえ、  
つと」

そう呟いた飛鳥は地面を思い切り蹴った。震脚。屋敷全体が揺れるような規模の震脚は容易く恭也の動きを止めた。

「バカなっ・・・!!」

「そうゆうことで出直してこい」

恭也が動きを止めた瞬間、恭也の目の前に現れた飛鳥は恭也の腹を思い切りぶん殴った。

「絶招・・・!!」

ドゴンツ、とおおよそ人体では発しえない音を出しながら恭也は床に崩れ落ちた。

## 第一話（後書き）

長かったんでいったん切ります。それと作者はとら八の設定が良く分からんですので、高町一家が習っていると云う「御神流」なる物の詳細を教えてくださいと助かります。感想ご指摘待ってます。

## 第二話（前書き）

短くなった。これならまとめても良かったかも……。独自解釈多数。・・・と言っかそれしかない。矛盾点はご勘弁を。グロ注意。

## 第二話

### 第三話

頭上で揺れる軽く百万は下らないシャンデリアを見、目の前で崩れ落ちる一人の青年と少し離れた場所で苦悶の声をあげているメイドを見、さつきまで座っていた椅子の向かいに座っている今もなお信じられないと言うことをまったく隠そうともしない女性を見、飛鳥は心底下らない、と言う顔をしながら客間の扉に向かう。だが、向かう途中にまたしても声をかけられた。

「・・・待ちなさい」

「なんだ？」

椅子に座る女性      月村    忍は床に倒れている二人      高町  
恭也とノエルを心配そうな顔でみたあと悠々を扉に向かう飛鳥を呼びとめた。

その屈辱と覚悟が混じった目を赤く染めながら、自分が日頃から忌々しいと思ってやまない吸血鬼のあかしである、**魔眼**を発動させながら飛鳥の目を見た。

月村 忍の誤算は三つ。

一つ。飛鳥を、『Get Backers - 奪還屋 -』を子供だと思  
って侮ったこと。

一つ。自分の味方である二人を信じ過ぎていたこと。

そして最後。それは 自分が、最も忌むべき力を使い飛鳥を屈  
服させようとしたことである。

忍は。『夜の一族』、月村家の当主。月村 忍は憤っていた。

なにが子供なら大丈夫だ。なにが『本物』の遣いだ。侮っていたの  
は、見くびっていたのは自分ではないか。 あの、血と硝煙と  
悲鳴と絶望が響く『裏』で名を馳せているということにもっと気を  
つけてしかるべきだったのだ。

実際、それは床で倒れている二人ともう一人のメイドであるファリ  
ンにも言えることだが、それを忍は考えない。これは全て自分のせ  
いだ、と抱え込む。これがもし容赦情けとは無縁な人間だったら？  
それを考えるだけで今も身を焦がしている後悔の炎が彼女を更に焦  
がす。それを恭也達が望まないにもかかわらず。

苦痛に顔を曇らせ、呻いている二人は忍に言葉を発さない。いや、  
発せない。激痛に身を擦らせ呼吸をすることさえ困難な二人は忍に

励ましの言葉さえ言えず、愛する人（主）に逃げると、叫ぶことすら、出来ない。

ここまで、話してしまった。なら消失点（じふんてん）はもう過ぎた。折り返し地点は地の果てだ。

月村を、『夜の一族』を、吸血鬼（きゆうけつ）を、化物（けぶつ）を知ってしまった、教えてしまった。彼には、飛鳥には。口止めを、死を。『死人に口無し』の体現を。無理だ。手札（てしふ）（味方）はいない。倒れた。倒れている。ファリンを？無理だ。彼女は戦闘に向いていない。自分で？荒唐無稽。彼には一分の隙も見当たらない。それどころか自分では彼に触れることすら、出来ないだろう。

ならば、吸血鬼（きゆうけつ）としての忍（しの）びなら？

吸血鬼の、今もこの体に流れる血には様々な恩恵（めぐみ）（呪い）がある。その常識外れな身体能力（しんたいのうりょく）（しかり）、その桁外れの回復能力（かいふのうりょく）（しかり）、そして、魅了（めいりやう）の魔眼（まがん）（しかり）。

吸血鬼には弱点があつてあまりある。日の元を歩けず、水を渡れず、ニンニクを嫌い、十字架を恐れ、心臓に杭を穿てば死ぬ。

だが、それを補つてあまりある能力が吸血鬼にはある。

その最たるものが先程挙げた、人の体を簡単に引きちぎる膂力、身体能力である。その次は？霧になる？犬や蝙蝠に変身する？血を吸う？

違う。それは違う。

それは魔眼だ。そう、魔眼。目を合わせれば　それだけで事足りる。目線を合わせる。その誰でもしそうなそのほんの仕草で吸血鬼は人間を自分に従う畜生に成り下げる。

忍は、その魔眼を、その恐ろしい目を使った。使ってしまった。吸血鬼が嫌いな自分が吸血鬼として力を行使する。それが忍にはたまらなく気持ち悪かった。だが、これで我が家の私の一族の安全は保障される。後は魅了されこちらの命令に従う飛鳥（傀儡）にどこから飛び降りさせ自害させれば事足りる。　いや、使った、使ってしまったなら。堕ちて、堕ちてしまったのなら。その力を使うべきだろう。



声にならない悲鳴が忍の喉から迸る。杭で手足を固定されてもなお、体を必死に動かそうとしながらあらん限りの力を集め喉から声をあげていた。痛い痛い痛いいたいいたいイタイイタイイタイ  
!!!

ドスッ!

「 ツ!?????!?!????? 」

はたして、その声とも言えないくもった声を漏らすことすら、忍には出来なくなった。喉に刺された真つ白な杭が忍の血で染まっていく。壁から垂れた血と喉から吹きあがる忍の血で既に床には血の池ともいつていい様相を呈していた。

「ふうん・・・吸血鬼ってのは本当なのか。これなら出血多量で死んでもいいくらいなのに」

そこに一際大きな杭を引きずりながら持つてくる飛鳥が感心した風に呟く。血の池に足を踏み入れた飛鳥の靴には血が大量に張り付きネチャネチャと粘着質な音を立てている。それが、忍には死神の足音にしか聞こえなかった。

「ま、いくら吸血鬼でも心臓に杭を打てば死ぬだろ。じゃ、おさらばだ吸血鬼」

静かに飛鳥は忍の血で濡れた大きな杭を忍の心臓に宛がう。

ああ、もう痛みを感じることもすら億劫ね。

間近に忍び寄る死を目前に忍はただ静かに目を閉じた。

世界に罅が入った。

「 ジャスト、一分だ」

忍はおそろおそろ目を開いた。

「悪夢あくむは見れたかよ」

目を開けたその先には不敵に笑う飛鳥の姿があった。

「大丈夫か！？忍！？」

「忍お嬢様！お体に異常は！？」

自分を心配する二人の声がどこか遠くに聞こえた。

「要するに全部、試していたと言っのね貴方は」

ブスウとした顔をしながら忍はそう言ったあと頬のついでにふた

筋の痕を隠しながら新しく入れてもらった湯気が立つ紅茶に口をつけた。

「中々にきいたろ？オレの『邪眼』は」

「ええ、そりゃあもうたつぷりと」

今までの所業に不機嫌さを隠そうともしない忍は内心で安堵していた。

なんでも恭也ノエルがノックアウトされた所までは現実だがそこから先は夢だったらしい。と言ってもとびっきりの悪夢だが。

だが、それでも良かった。忍にとって自分が吸血鬼として力を振るうという現実を夢に変えてくれたことは忍にとって幸이었다。思わず涙を流してしまうほどには。

なんでも、彼の邪眼とやらは目線を合わせた相手に一分の幻想ゆめを問答無用でみせるらしい。ならば何故忍の方は効かなかったのかと忍は飛鳥に聞いたが飛鳥は

「格が違うんだよ、格が」

としか言わなかった。忍は納得しなかったが『蛇遣い座 アクスレピオス』直伝の邪眼と吸血鬼とはいえ血が薄まっている忍では勝負にならないことを知る由もなかった。ちなみに恭也とノエルが回

復したのはその一分の間に看病したのだ、飛鳥が。

「最初は意味がわからなかったけど、力の差は分かっていたし忍の様子には心配したが彼は「ちよつとお灸を据えただけだ、命の危険はねえよ」といったんだ。だから、まあ、害はないかな、と」

そうゆうことらしい。飛鳥を簡単に信じる二人もどうかと思うが呆然自失、身体衰弱していたのだ。許してあげる。要するには二人はまず忍の安全が第一だったのだろう。

「それで貴方は何故こんなことしたのかしら？ 答えなさい。・・・  
答えないと捻りつぶすわよ」

据わった目で見られ殺気を飛ばされている飛鳥はどこふく風と言った様子で受け流し忍の問いに答えた。

「情報の確認と依頼人の誠意を見るため。あなたの言ったことはあなたが言う「吸血鬼の血液」がないと矛盾する。なら、どうやってそれを確かめる？」

「もし本当にあんたが吸血鬼ならその情報を秘匿しようとするはずだ。オレにばらされてもメリットなんて何一つないからな。なら後は簡単、そばにいる二人でオレを抹殺、または脅迫」

「だがそれが出来なかった。ならば他に違う力をおもうはず。誘うためにゆっくり扉に向かった案の定。あなたの目はそれ（吸血鬼）を証明するのに十分過ぎる」

「誠意についてはまあ、合格と言うか・・・期待以上だったな。あなたの話じゃ別にわざわざ「吸血鬼の血液」と言わなくても事足り

る。例えば開発中の新薬とか大事な研究成果、とかな。打ち明ける必要のない真実を打ち明けるあんたには誠意も確認できるし、その姿勢は信用も信頼も出来る」

「変な話だがこれも性分でな。勘弁してくれ。それと依頼は受ける。その奪還、この「Get Backers - 奪還屋 -」が請け負った」  
依頼人を試す仕事人なんて論外。誠意の所に関しては忍の油断と言  
うか迂闊さがあったが、別に損はないのでそこは忍は黙っていた。

こうして嵐のような跡を残しながら二人の交渉は幕は閉じた。

mission 「吸血鬼の血液」の奪還。当組織の壊滅または  
情報。

## 第二話（後書き）

かつてここまで忍に強く当たったSSがあっただろうか？  
吸血鬼に関してHELLSINGを参考していますが華麗にスルー  
で。

誹謗中傷はご遠慮ください。感想ご指摘待ってます。

## 第三話（前書き）

キャラ紹介はいつにするべきだろうか？それともする必要はないのだろうか？

## 第三話

### 第四話

Act 海鳴センタービル・屋上 深夜〜早朝

海鳴センタービル。海鳴市が都市発展の象徴として予算二億円をかけた250Mという超高高度を誇るビルである。中にはショッピングモール・レストラン・スポーツジム・ゲームセンターなどが乱立しており近隣の休日は近隣の市町の人間と海鳴市の人々でいっぱいになる。夜になると七十階を最高とする海鳴センタービルの最上階からの夜景、と言っても大したものではないが、を楽しむためのカフェテリアが開いており夜遅くまで喧騒が絶えない。そんなビルの屋上にとある子供がいた。

「・・・まったく、なんでこんなことしなきゃいけないんだか」

ぼやくようにその言葉を言い放った子供・・・飛鳥は背中に背負った子供の丈には不釣り合いなりユックを担ぎなおし小さくため息を吐いた。

事の発端は昨日に遡る。

飛鳥は依頼を受けたあと、そうそうに計画を建てていた。期限は五日間。今回奪還を依頼された‘ブツ’は四日間、港の倉庫に厳重に保管されている。最新鋭の警備装置ばかりで固められていたそこに忍び込むのは、一昔前ならまだしも、飛鳥が知らないモノが多すぎるために入ることを諦めた。・・・実際、飛鳥なら力技で行けるのだが態々面倒くさいことをする必要もないとそうそうに諦めた。

得てして

得てして人間とは目標をもうすぐ達成しそうになると気が緩むものである。ならば、と飛鳥は四日間を諦め、‘ブツ’を船に乗せたあと、そこを狙うことにした。今回、持ち出すために選ばれたのは小汚い船ではなく、豪華客船とも呼べる巨大な船だった。

一般的にそうゆう類の船に乗ることがないような人が思い浮かべる物と比べると小ぶりだが、それにしても十分過ぎる大きさである。だが外装はそうでも中は海外に輸出する商品と乗組員だけしかおらず、乗客と言える物は存在しない。

タイムリミットはおそらく四十分前後。今回の船の速度は24.0ノット。1ノットは、1時間に1海里進む速さと定義されている。現在の定義では1海里（国際海里）  
＝ 1852メートルである

ので、1ノットは1852メートル毎時だ。つまり一時間で約二十三キロメートル進む。通常、船に乗せられている救急艇が行けるのは約二十キロメートル。ならば最悪の場合はよしんば五十分と言ったところだろう。濡れてもいいのなら泳いで太平洋渡るくらいは飛鳥は出来るのだが、濡らすわけにもいかないのが救急艇による脱出ヘリの手配でもしたいものだが、それはさすがにばれてしまう。

以上が、喫茶店『Blas t of Wind』のマスター、兼、情報屋も兼ねている王<sup>クワン</sup> 童虎<sup>トウコ</sup>が飛鳥に提供してくれた情報だ。

飛鳥からしてみれば相も変わらず一体どうやってこんなモノを仕入れてくるのか不思議でたまらないのだが、それは情報屋と言うモノを営む全ての人間に言えることだろう。

だが、童虎を持ってしても分からなかったのは、‘ブツ’を奪った組織と人員。そして乗組員は全員買収されていたことである。

と云うか仲介屋や情報屋、並はずれた戦闘技術を持つ童虎は一体何者だ。

そして五日目の早朝、まだ朝日が出ないような時間に出港することを知った飛鳥はその半日前に忍び込もうと思ったのだが、まあ、いるいる。警備の黒づくめが沢山。誰か一人いなくなっても分らないようなものだったが飛鳥が話を聞く限り何か異常があったのならすぐにわかるようになっていいるらしく。それを回避するには相当な数を掃討しなければいけないので不必要な殺人はしない主義の飛鳥は歩いての侵入は断念し、空からの手に変更したのだ。

そして時間は最初に巻き戻る。

飛鳥はリュックを降ろし、その中に入っていたパーツを組み上げていく。

ビルの屋上の壁に立て掛けられた二等辺三角形の様な形状をしている物は知っている人がいれば「ログロウイング」と言うだろう。

ほどなくして、それは完成した。

「ハングライダー」

それが今回、船に乗り込むために飛鳥が入手したものである。

ハングライダーの速度と言うものは本来、地表あるものを目標に降りれるようなものではない。巡航速度は20 km/hから130 km/h程度。はつきり言って、無謀すぎる挑戦だが・・・飛鳥はそれを力技でなんとかする気らしい。こいつ、本当に人外である。

「じゃ、行きますか。この無武装国家で対空兵器がないことを祈るけど・・・」

朝日がもつすぐ出るか出ないかと言う黎明の時間。そういつて、飛鳥は助走をつけ僅かに張り出されたビルの縁から飛び出した。

ヒュウウウッウウウ・・・

飛鳥の耳元でハングラライダーが風を切るあと耳に届く。その飛行は危なげなくと言うモノとは程遠く、グラグラと揺れ安定性など欠片もない。当り前だ。本来、子供ともいえる飛鳥がのる乗り物ではない。成人した大人でさえ危険なのだ。それを安定してないとはいえそれを繰る飛鳥のバランス感覚が凄いと云える。

「・・・あれ、だな。時間的にはギリギリ。しっかしこれ。安定しないな・・・最悪、ブチ壊していくしかッ・・・！」

飛鳥の目に例の船が見えはじめたとき、グラグラと揺れていたハングラライダーを操ろうしながら船を見たとき戦慄した。何故か。それは飛鳥が危惧した対空兵器が本当にあつたからである。

『JM61-M』

日本の海上保安庁の巡視船や、海上自衛隊の掃海艇に搭載されている日本がライセンス生産し、戦闘機に搭載されていた物を、艦に乗せるために新開発したものである。元は毎分600発を発射されるようなバケモノ銃だがそれを毎分450発〜500発までに落とし薬莖を回収できるように改造されている。

「まっずー!やばいやばいやばい!ここで降りるしか・・・!・・・?・・・何故撃つて来ない?」

当然の帰結で多大な破壊を撒き散らす兵器を前に迷いなく海に飛び込むことを選択しようとした飛鳥だったが相手に何の反応もないことを疑問に思うと甲板の様子を観察し始めた。

「・・・日が出てなくてもライトはある。見えないはずがねえ・・・」

人の姿がまるでなかった。人の姿が確認できず、視認できない。事前の情報では少なくとも数の乗組員を確認した飛鳥だが、飛鳥の目には人つ子一人映らなかった。

「・・・僥倖なのか。畏なのか。どっちにしる、降りて見なければわからねえ、ってことか。めんどくせえ」

畏の確立の方が高い。せつかくの装備があるのに使わなければ意味がない。可能性としては職務怠慢、内乱、畏、それとも飛鳥以外に誰かいるのか。一番確立が高いのはやはり畏の類だが・・・

「・・・行ってみりゃ分かるってか、クソったれ」

はあ、とため息を一つついて飛鳥は船の上に差し掛かった瞬間に固定用ギアを外し船の甲板に降り立った。

### 第三話（後書き）

短いツスね。なんか迷走してます。

ハンゲライダーやバルカン銃に関しては華麗にスルーしてやってください。

感想ご指摘待ってます。

## 第四話（前書き）

駄文です。文章が全く上手くありません。ご了承ください。

## 第四話

### 第四話

カツツ、と履いているブーツが音を立てる。暗闇が船を染めその姿を覆い隠す深夜。飛鳥は船にハングライダーで潜入すると言つ無謀な挑戦を成功させ、視界を隠す暗闇のなかを気配を断ち、息を押し殺しながら下層に降りる階段に向かって進んでいた。既に艦長室や操舵室がある上層、最上層はその目で確認しており、あとは下層を残すのみだった。

(・・・気配がない？・・・いや、あるにはあるが・・・なんだ、この感じは？それにさっきから感じる異臭は・・・何か腐ってんのか？)

下層に降りるための階段に向かう飛鳥は肌に鳥肌が立つの抑えられず、ピリピリとした緊張感を感じ、常人より遥かに機能が上な嗅覚は僅かな異臭、腐臭とも言えるそれを捉えていた。

(・・・人が全くいない？・・・そんな筈はねえ。王の話しじゃあ間違いなく人が乗っていた筈だ・・・)

人がいない甲板にブーツが金属を叩く音が響く。甲板の上にあるライトはその役目を果たすつもりがないのか辺りを照らしたすことはなく、海上を進むためのスクリュウが水をかく音が暗闇に常に響いていた。

(くそつ。なんだこりゃあ、C I W S群ガトリングがあつたのに使おうともしねえ？それ以前に警戒している様子すらねえ)

飛鳥は小さく舌打ちすると足を止め、いつの間にか火が消えていた煙草を吐き捨てると市販の物ではない王特製ワツのケースを取り出した。そのなか入っていたまたもや王特製ワツの煙草を取り出し口に啜える。そして鈍く銀色に光るジツポーを取り出し火を付け、飛鳥の近くにあったコンテナが二つの影の姿を映し出した。その瞬間、飛鳥はその場から飛び退いた。

飛鳥が潜入した船、飛鳥は知る由もなかったがセンチユリー号と呼ばれるこの船の最下層。部屋とも言えない広大な空間は薄暗く、約二メートルはあろうかと言う円形の巨大なガラスケースが乱立し、その根元より少し上にはガラスケース内部の水圧・量など操作するパネルが設置され、根元からは数えるのが億劫に思えるほどの大小色彩、共に様々なコードが伸びている。やがてそのコードは一際大きなコンピュータに集められていた。縦と横に三メートルあろうかと言うモニターには様々な文字が浮かんで消えていく。

「クキ、クキキキキキ」

カタカタとモニターの下に設置されているキーボードの上を指が乱舞しが高速で音を立てる。そしてそれに被せるように誰が聞いても不快な笑い声が空間に響いていた。

「クキキキ、良い！良いよ！実に良い！キキキ！吸血鬼！鬼！化物！怪物！おとぎ話！」

狂ったような　否、実際狂っているのだろう。笑いながらキーボードを叩き続ける男は思わず達してしまいそうな快感を覚えながら顔を喜悦にそめ顎を伝って落ちていく唾液を気にも留めず笑い続ける。

「なかでもあれは最高だ！食人鬼<sup>グール</sup>！食屍鬼<sup>グール</sup>！グール！人を襲い、人を喰らい、人を貪る！餓鬼、ガキ、餓鬼！飢えず、疲れず、恐れない！人を喰らう鬼、吸血鬼、化け物！クキキキキキキキキ、喰鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼鬼！」

キィ、と音が響き広大な空間に入るための唯一のドアが閉まる音がした。

「・・・はあ、相変わらず休む様子すら見せませんね」

「そう・・・何とも難儀な依頼人ね」

「全くだね。こちらとしても一度依頼を受けた以上、放棄する気はないけど俺個人としては今すぐ降りたい気分だ」

「……」

先程の広大な空間、仮に研究室と呼称しよう。研究室の隣に高級ルームの様な一室。そこに四人の人影があった。この人間たちは今回雇われた、「守り屋」と言われる非合法なやり方で依頼人やブツを専守防衛する人間だ。そして今回雇われたこの四人だったが、出港して数時間。既にやる気をなくしていた。

「……外はどうだい？」

「相変わらず　地獄、よ。師匠」

「恐らく依頼人さんがいる部屋？と僕たちがいる所以外は既に魔の巣窟でしょうね」

「……」

「さっきまで悲鳴が絶えなかったけど……もう聞こえなくなったわね」

師匠、そう言われた人間はとても柔らかいソファアにゆったりと座ると静か、に呟いた。

「……俺は可能性が探るのが好きだけど、あの食人鬼ケイルの群れを通り抜けてここまで誰かが来る可能性ってのは　どれくらいだろうねえ」

上の甲板、おそらく自分と先程から喋らないもう一人だけが気づいている来客に、ラフなジーンズに皺くちやのシャツを着て灰色の長髪を伸ばした青年　直木　飛縁魔は薄く、笑った。甲板から発



最初に目につくのはその腐った体躯。頭髪は抜け落ち、眼球の周りが腐ってしまったのか眼球が零れおち目の内部の筋繊維が見えている。僅かに開かれた口からは呻き声以外に漏れず、腹を破られたのか腸を引きずっているものもある。鼻を衝く腐臭は視覚から感じる不快感を一層、際立たせた。

「・・・クソツタレ。割にあわねえ」

所々に見える噛み傷は、共食いでもしたのだろう。人の、歯型を想起させた。

そして飛鳥は船が何の音沙汰もなかった理由を理解した。強制的に、理解させられた。

数時間前までここが現世の阿鼻叫喚の地獄だったことは飛鳥にも容易く想像できた。

「・・・どつする」

ジッポーが照らし出すなかにはおそらく乗組員だろう人間たちが体を腐らせ、飛鳥の前に立っていた。

大量の食人鬼<sup>グール</sup>を前に打開策を探す飛鳥だったが、ピーと言う鳴き声に気づき上を仰ぐ。すると海鳥かなにかが滑空しながら一人、いや、一匹のグールに向かっていた。

海鳥はグールに顔から衝突するとその零れおちた目玉をその嘴で啄

む・・・前に劇的な変化が起き体を腐らせていった。そして数秒も  
しない内に溶けて無くなった。その様子を一部始終を見ていた飛鳥  
は思わず冷や汗を掻いていた。

「おいおい、触っただけでおさらばかよ・・・」

幸いなのは人を腐らせばがらも活動させるウイルスか何か人間に  
しか効かねえことか、と呟いた飛鳥は啜っていた煙草を一頻り吸い  
切り吐き出した。

「・・・ま、オレにとっちや幸いでもなんでもねえけど」

(それ以前に、気配が消えた。死んでるから気配がないとかじゃね  
え。オレにあたかも誰かが生きているかのように気配を操作した奴  
がいる)

襲われるまで飛鳥が全く気づかなかつたのは理由がある。最下層に  
いる飛縁魔が飛鳥に気づきその呼吸を乱すように所々で気配を送つ  
たり断つたりを繰り返していたからだ。気配を敏感に察する飛鳥は  
それ故に自らより上手く気配を操作する飛縁魔によってその気配察  
知を邪魔された。

そして、一度それに気づいた飛鳥は二度と引つ掛かるような  
ことは、ない。

「待ってるよクソツタレ・・・！今すぐそこに征<sup>い</sup>つてやる・・・！」

気配と言う名の一瞬の残り香を敏感に感じ取った飛鳥は呻き声を上  
げ自らに接近していたグールの群れに突っ込んだ。

## 第四話（後書き）

絶賛迷走中、魔法少女の要素が欠片もない。  
感想ご指摘待ってます。

## 第五話（前書き）

イエイ！魔法少女成分が全く出ないよおかしいな！

## 第五話

### 第五話

目の前を埋め尽くすのは食人鬼グールの群れ。死者が歩いている光景はいつも簡単に地獄ということを想起させ、甲板を照らす光が救いの光に見えることは飛鳥には　　　ついぞ、なかった。

グールの群れを目の前に対して飛鳥がとつた行動は単純にして明快。冗談ではない膂力で、殺戮本能と捕食本能のままに自らに向かつてくる腐った手足を、避け続けることだった。血に濡れ、爪の間に肉が挟まった鋭利な爪が鼻先をかすめる。甲板で乗組員が履くべき固いブーツ風を切り裂きながら胴体に迫るが臆することなくブーツの部分を蹴り返す。人間の外すべきではない筋肉の枷を外したことにより発揮されたあり余る膂力で両腕を広げ掴みかかってくるのを軽くニメートルは跳ねて躲す。

王特製ワの煙草。その灰を撒き散らしながら、優雅に、大胆に、舞踏のように避け踊る。飛鳥は踊り、グールは踊り。飛鳥は踊られ、グールも踊られ。踊り踊られ踊られる。

踊れ、踊れ、踊れ。死の舞踏を。その心の気がすむまで。その体がなくなるまで。魂を　　燃え散らせ。

「はっ？冗談。こんなんで死んだら師匠（クソ野郎）にフフとか言つて見下されるに決まってるだろ！」

頭に浮かんだ、いつかの修行を思い出した飛鳥は笑い飛ばしながらも短くなった煙草を吐き捨てる。吐き捨てられた吸殻は甲板に落ちた瞬間、腐った足に踏み潰され真っ赤な火は欠き消えた。

「……っと。ここが階段か？わっかりにくい所に置いてくれやがって」

キキユ、と自らのブーツが音を立てる中階段を見つけた飛鳥は立ち止まる。愚痴りながらも懐からまたも煙草を取り出す。約、六歳児の手には余りにも大きいジツポーを取り出しながら火をつける。ジツポーが照らす光には飛鳥の周りで手や足を振り上げているグールが見えた。それに気づきながらも飛鳥は誰にも居ない空間に向かって話だす。誰とも知らない誰かに、聞かせるように。

「……大体なあ。殺戮本能だけで動いてるような奴らなんてよお

」

「グールの群れの対処方法？」

「そうだね。これから先の長いようで短い‘守り屋’人生。何があ  
るか分らない。だからここで対策をたてようとそうゆうわけだ。安  
全無事に切り抜ける‘可能性’は増やしておいて損はない」

「ですが師匠。正直に言うとお対処方法なんて「素手で戦わない」と  
か「攻撃は絶対に受けない」、「一目散に逃げる」くらいしか思い  
浮かびませんが」

「・・・」

貨物船・センチユリー号の最下層。客室のように整えられた一室で  
は。直木 飛縁魔が優雅に紅茶を啜っていた。一つの一つの動作が  
様になっており、世の女性が見れば思わず見とれていたことだろう。  
この中で唯一の女性である煙々羅は最初こそ見とれていたが最近で  
は見とれることはほとんどなくなっていた。

「そうだね。それは正しい。正解だ、正答だ。ではここで問うよ。  
俺が君達に教えたことで人、‘プロのプレイヤー’と相対したとき、  
その人たちのどこ（・・・）が一番恐ろしいのか覚えているかい？」

「一番恐ろしい所、ですか？」

「確か・・・、理性と戦術を以って戦いに臨む、だったかしら」

「・・・」

泥田坊と煙々羅の返答に弟子たちがしかりと自分の言葉を覚えていたことに歓喜と感謝を覚えながら、飛縁魔にしては珍しくカップをソーサーに戻すと両手を広げ、大仰に、舞台上で喋るように、話しました。

「そうだ。人間と確固とした自意識を持った生命体が、あらゆる手を模索し、自らに足りえないモノを何かで補強し、格上の相手に罠を張り、格下の相手に油断せず、容赦せず、自らが考えうる全てを以って戦いに臨む。これほど恐ろしいほどことはなく、これほど面白いことはない。俺は常日頃からそう思ってたやまないんだ」

たったの二文字。それだけの差でこうまで違う。長年の経験と言う名の価値ある積木は飛縁魔の中で着実に組まれ、敵は居ないと、言わしめた。その結果は自らの敵対者に、相対者に、接触者に、何かを、自らを御しえる、何かを、可能性、という言葉に覆い隠された、何か、を見つけることに終始した。

「最初に話題に戻ろう。確かにグールは恐ろしい。疲れない、痛みを感じない、死なない。常人を容易く越える膂力。それはそれは、恐ろしい。だが、そこに理性はない、感情はない、思考はない。あるのはただ原初の本能、それだけだ。食べる、食すと言う本能。起源と言ってもいいかな。それはその起源を達成するには理想的な速度を生み出すが、」

「戦いと言うモノに於いて、その起源は何のアドバンテージ

も持たないよ。戦うにも色々ある。そして逃げることも戦いだ。戦  
略的撤退だ。武器を使って戦いながら、攻撃を受けないように  
戦いながら、一目散に逃げるように戦いながら、狙うんだよ」

「 同士討ち、っていう結果をね」

飛縁魔は驚いたような、慄いたような一つの視線をその身に感じな  
がら、甲板を見上げるように部屋の天井を仰いだ。

「 同士討ちが関の山だぜ？」

振り上げられた手と手は同族にしか、当たることはなかった。

すんでの所で屈んだ飛鳥の上を通りすぎた手はお互いの首や頭を直  
撃した。グシャ、と言う音をたてながら周りのグールは崩れ落ちた。

腐っているからこそ、人並み外れた膂力を出せる。それがグールだ。  
だが、それは諸刃の剣でもある。枷が外れただけの筋肉では防衛も  
クソもあったものではない。それこそ転んでしまっただけで体の一

部を欠損させるだろう。体を衝撃から守ると言う人が無意識にしている事柄を意識を持たないグールが意識的に出来るはずもない。人並み外れた膂力でお互いの首や頭を討てば折れたり潰れたりするのは、当然のことであり、必然でもあった。

「さて、と。どこの誰だか知らねえが随分と嘗めた真似をしてくれるじゃねえか。この借りは必ず返させてもらわねえとな」

足元で蠢くグールを苦虫を噛み潰したような顔で一瞥したあと、ギギと音を立てながら開く扉を閉め鍵をかけ、飛鳥は下階層へと降りていった。

『もう既に人を殺した君に言うのもなんなんだけど、憎しみで人を殺してはいけないよ。許されないことに変わりはないが、憎しみだけは頂けない。憎しみで人を殺した人はきつとどうにか成ってしまう。何か、何か、が、堕ちて、しまっんだ。人を、人、として構成している、何か、がね』

‘アイツ’がそう言ったのはいつだったか。会ってすぐだった様な気もするし、別れることに少し前だった気もする。諭すように見越すようにそう言った‘アイツ’の顔が酷く印象的だったのをよく、覚えている。意味が分からなくて直接問い質したりもしたが結局、教えてはくれなかった。

『飛鳥・E・アインス』には前世の記憶と言うものがない。転生したと言う事実と学習して覚えた知識は覚えているが、己が誰で、どこに住んでいたかと言う記憶はない。いや、ないと言うより、なくなったが正しいのかもしれない。幼少のころの、いや今も幼少であることには変わりないが、濃すぎる経験により記憶を時空やら別次元に忘却してしまった。

故に、‘アイツ’との出会いは一生忘れようはずもない。本物の天才と言うのは‘アイツ’の事を言うのだと、飛鳥・E・アインスは忘れない。呪いと言うには温かく、縛りと言うには緩く、恋と言うには夢かった。

そんなことを考えながら、飛鳥は甲板でグール相手にしたことを下階層でも繰り返し返していた。

‘先の先を読む’。それが戦闘の基本だと飛鳥は思っている。グールの攻撃を誘導し、手や足の軌道から攻撃を予測し、地面の条件を加味し、本能に従って迫りくる凶撃を同族相手にぶつけさせる。言うのは簡単だが、実行するには非凡な才が必要な事柄を飛鳥は無意識に体を動かすことで達成していた。

既にこの船で向かうべき所の目星はついている。操舵室や倉庫、食堂にも居なかったがそこに会った船内図に最下層に船長室と言う一室と、一際広い空間をもつ貨物室。十中八九、‘ブツ’とその障害はそこにいるであろうことは飛鳥に予測がついていた。

カツツ・・・

階段を降りると、光が欠片も感じられない暗い空間に出る。光源がないためどこまでも広がっているように見えるその空間。飛鳥はグールと辺りを見回すとおもむろに歩き出す。そして十数歩、歩いたあとその場で止まり右足を唐突に上げ思い切り空を蹴りぬいた。

ガラントツ・・・ガラツ・・・ガラツ・・・

いや違う。空ではなかった。飛鳥の足によって蹴りぬかれた空間は光がある部屋に転がり出る。黒く塗りたくられた扉は誰かの足元の近くでその動きを止めた。飛鳥はその扉を気にも留めず、ただ、その誰かを見続けていた。

部屋の中に立っていたのは、三人だった。それぞれ異様を誇っており、目立つ容姿をしているが飛鳥は気にしていなかった。扉を蹴りぬいたあと、いや、扉を蹴りぬく前から常に一点だけを見つめている。堂々と三人に相対した飛鳥はジーンズのポケットに突っこんでいる手をそこから出すことはなかった。

「・・・初めまして、小さな刺客さん。あのグールを群れを抜けてきたことは素直に称賛に値するぜ」

「廻りくどい言い方だな、守り屋。そこは素直に称賛するぜ、でいいだろうが」

「これは形式的に言ったままでだ。君が気にすることじゃないな」

「そうか。オレはてつきり遠まわしに貶されてるのかか思ったぜ」

「とんでもないな、可能性。これでも本当に褒めてるんだぜ。特にグールの相手をまともにせず同士討ちを狙ったことは賢明だ。ああ、言っておくが一生懸命の懸命じゃないよ？賢い方の懸命だ」

「・・・随分と、上から目線じゃねえか」

「それなりの経験はあるからね。これでも君の格上だと思っておきたいんだ（・・・）。・・・それと可能性。煙草は良くないな、個人的に、社会的にも。君の未来と可能性が潰れるぜ」

「大きなお世話だ。オレに指図するじゃない。オレに指図できるのは‘アイツ’だけだ」

「その‘アイツ’がもの凄く気になる所だが、ま、置いておこう。それにしても君はもう少し力を隠す努力した方がいいな。それじゃ、誰も油断してくれないぜ」

「百も承知だ。こうしていても手前が弱そうに見えて仕方ねえよ。イラつくが手前に学ぶことは多そうなんだな。・・・今も、学ばせてもらってる」

一口に強さと言っても、その種類は様々だ。しかし、それら無数の強さはおおよそ大体的場合、大まかに二つに分けることができる。

一つは 華やかな強さ。

つまり、見ればわかる（・・・）強さ。もつと言うならば分かりやすい（・・・）強さである。その強さが触れるまでもなく見ただけで、見るまでもなく聞いただけで、聞くだけでもなく思うだけで、思うまでもなく知るだけで、万人にはつきりとした形で伝わる 説明の必要も解説の必要もまるでない、そんな伝達力を有する強さだ。

飛鳥はどちらと言えばこちら側に属する。飛鳥の強さは万人まで、とはいかないがある程度の心得がある人間ならその強さが分かる。分かりやすいくらい分かるのだ。

そしてもう一つは 地味な強さ。

地味と言えはいかにも強さが、近距離で向き合っても伝達しにくいと言うことだ。知ろうが思おう見ようが触れようが、その強さがまるで伝わらない。特に意図して実力を隠しているわけでもないのに、どうしてなのか、その強さが把握できない。

強いどころか、弱くさえ見えるのだ。

派手さはないし、華もない。

魅力に欠けて、見栄えも悪い。

だがその、分かりにくさ).....(はどうやったって対処のしようがない。

「そのようだ。いやはや未恐ろしいな、可能性。こうして向かい合っていると足が震えて仕方ない。それと、震え、とは怯えじゃないよ、武者震いと言う奴だ」

あくまで飄々と。緩やかに。何でもなし様子をもって飛縁魔は言う。

「そして、何故だろうな、可能性。君は既にオレの強さを体得し始めている。あくまで普通に、自然に、当然に。意図して力を隠していること意図させないよう意図している。何故だろうな、可能性。オレには既に君がとても弱く見えるよ」

「そいつは光栄だ直木 飛縁魔。聞いたことがあるぜ、異質な強さ。遺失な強さ。既に強さを失ってしまったかのような、強さ。オレは手前のメガネに適ったのかな」

飛鳥は笑う。自身が新たに得た力に、喜ぶ。喜んで、笑う。隠さず、臆さず、感謝する。どこまでも戦闘の天才な飛鳥は、どこまでも強さに対して貪欲だった。

「そうか、可能性。君はオレの名前を知っているか、「Get Backers - 奪還屋 -」。ならば今の話から何の脈絡もないが、可能性。オレの弟子を虐めないでくれると、オレは嬉しい」

飛縁魔がそう言った瞬間、見計らったように、飛縁魔の両隣の二人が、崩れ落ちた。

「そう言うなよ、被害を度外視した埒外な戦闘に巻き込まれないようにしてやるんだ。むしろ、感謝してほしいくらいだな」

「そうかい。ま、いいさ。じゃあ、始めようか」

「賛成だ。何も話すためにここに来たんじゃねえからな」

そういつて、唐突に、緩やかに、構えもせず、ゆっくりと、二人は、円をなぞる様に、回りだした。

緊張を孕んだ空気は、張りつめもせず、むしろ弛緩している。誰が

想像できるだろうか。今相対している二人がこの世界で掛け値なしにトップクラスの強さを持っている二人だと。緩く、温い、弛んだ空気は動き出す。本当にゆっくり、と。静かに。

「……部屋の端で身を低くしてる。ケガ、したくなかったらな」

ドゴンッッッッ！！！！！

両者の位置が相手の居た位置を通り過ぎ、同じ場所に戻る、その寸前。

二人の拳は、激突した。

## 第五話（後書き）

これでも五千字ちょっと。正直、筆が進まない。時間がないよ。最近、ドラえもんが机の引き出しから出てくる夢を良く見る。末期だろっか。

感想ご指摘待ってます。

## 第六話（前書き）

はっはっ！魔法少女？リリカル？マジカル？あるわけないだろこん畜生！

・・・すみません、調子乗りました。

## 第六話

### 第六話

ドゴンツツツツツ！！！！

衝撃波。音速を超えた物質が周りに巻くソニックブームや、石油・ガソリンなどの可燃性物質が大量に燃えることよって爆発するときに生まれる、衝撃が音波によつて大気によつて伝道するその現象。それが、二人の拳の中心、その場所から生まれていた。

大気の鼓動。部屋の中心で起きたそれは部屋にあつた家具や食器を吹き飛ばし、二人の周りは綺麗に円を描く様な何もない場所が広がっている。

泥田坊や煙々羅は吹き飛ばされる途中に意識を取り戻したようだったが、吹き飛ばされた影響で頭を強打。再度気絶してしまった。

両者とも周りの惨状を気にも留めずその場を動かずラッシュ、ラッシュ。一撃一撃に人を容易く殺せる威力が籠もっている拳を何度も、何度も、打ち出し続ける。

顔を通り過ぎた凶撃など感化せず、頬の切れた感触など頭から失くし、衝撃によつて軋む体など思考に余地もなかった。ただひたすらに超高速の打撃を重ねる。単純で野蛮で感覚的なこの戦闘はそこ一帯を別次元に括りとつたかの様な異様な雰囲気、醸し出すどころ

か、吹きださせていた。

両者とも無限とも言える程の体力を持つているのか、休む様子はなく、より激しさを増す拳戟<sup>けんげき</sup>。だが次第に飛鳥のそれには要所に要所に蹴撃が混ざり始めていた。

顔スレスレを通過していった蹴撃に飛縁魔は思わず舌を巻く。風を切る音に耳が悲鳴を上げるがそれすら気にせず飛縁魔は両手、両足を使った攻撃に対応し続ける。

通常、このような絶え間ない連撃、つまり手数勝負では足技と言われる分類のモノは余り使わない、というより使えない。確かに足には手の数倍の力があるとされているがどうしても片足立ちという不安定な状態になってしまったため、リスクが高い。もし攻撃を空振りなどしたら隙ができるし、ましてや体勢を崩してしまつたらその時点で致命的だ。

だが、この可能性はそれをまったく恐れていない。

攻撃のベクトルの操作。長年築き上げた戦闘理論と馬鹿みたいに戦場を回った経験によって会得したその技能を、フルに使いながら飛縁魔は考えていた。戦闘中に無駄な思考など邪魔なモノでしかない。と飛縁魔こそ思っているが、放つておけない興味は飛縁魔を支配していた。

空振りして隙を作っても、体勢を崩してしまつても、必ず回避できる自身があるのか。それともそんなことは絶対にはないと思考しているのか。とにかく、飛鳥の攻撃に躊躇いがまったく感じられなかった。躊躇わず次々と継々と蹴りだして、くる。何も恐れないその攻撃は加速度的に攻撃の速度を増していく。そして結果的に連撃の速

度は通常の拳戟と変わらない速度になっていく。

だからこそ舌を巻く。が、動揺はしない。精神は揺れない。

直木 飛縁魔はその体躯にも、精神にもしかりとした、決してぶれない、一本の支柱を持っていた。

終わらないかに見えた打撃の応酬は、第三者の望まれた（……）横槍によつて終了した。飛鳥はちらりと部屋の一隅を見ると飛縁魔の攻撃を少しの隙を作りながらも、意図的に撥ね除けるとバックステップ。飛鳥が今まで立っていた場所には斬撃の跡がくつきりと残っている。

「……ちつ、めんどくさい奴がいるな」

「そう言ってくれるな。愛弟子を余り販さないでくれると、オレは嬉しい」

「うるせえな。何もしてこねえから、てつきりこのケンカには参加しないのかと思ったのによお。……それに手前、何か変なことし

やがっただろ」

短くなっていた煙草を吐き捨て新たな煙草を取り出して口に咥えながら飛鳥は話す。

「ああ。力はね、そのまま可能性と置き換えることが出来る。まあ、左に振ったり右に振ったり、上に振ったり下に振ったり。色々と便利に使わせてもらってるよ。もつとも、君みたいに一人で向かってくるような可能性に使うのは初めてなんだけどね」

煙草に火をつけて一服。まるで緊張している様子のない飛鳥に苦笑しながら、飛縁魔は言う。

「成程な。攻撃のベクトル、ね。そいつあ、便利そうだな」

「見稽古、と言うモノがあるが可能性。君はその究極に近いな。ここまでの天才は初めてかもね」

(まあ、「強さ」で言えば二人目ではあるけどね)

「そうかい。ま、いいさ。オレには、関係ない。それと、どこぞの忍者もかくや、な手前の愛弟子は直木 七人岬、でいいんだな」

疑問形でありながら確定的。質問と言うよりは確認の様子に、飛縁魔は苦笑の度合いを深めた。

「どこまで筒抜けなのか知らないけど、その通りだよ。どうしてそこまで知っているのか、聞いてもいいかい」

「なんてことはねえよ。ただ『遊霊 アイリス』と知り合いつてだけだ」

なんでもないように言う飛鳥に飛縁魔はもう何度目か分らない苦笑をした。基本的に笑みを浮かべている飛縁魔だがここまで表情を変えたのは本当に久しぶりだ、ともし残りの愛弟子二人に意識があったら言うだろう。残り一人はそんなことは言わないだろうが。

「それはそれは・・・。成程。ならばオレ達のが分かるのは必然だろうな。ならば隠す意味もないね。彼は直木三銃士が一人、直木 七人岬だ。言っておくけれど、オレより強いぜ」

「知ってるよ」

綺麗に描かれていた三角は二つの頂点が一気に、一つの頂点に迫っていった。

吸血鬼とは実に恐ろしき能力、とも言えるものが何種類もある。客観的にもっとも恐ろしいのは吸血行為だろう。月明かりの中、人間が血を吸われている様子など見つけたら余程気の強い者でもない限り失神してしまうだろう。

では、見えないモノでもっとも恐ろしいモノは何なのか。

吸血鬼は血から相手の記憶を読み取る。血の量が増えれば増える程、読み取る量は増えていく。

それに狂科学者は目を付けた。

いくら自らの科学力が世界の二歩、三歩先を言っていたとしても能力とも言えるそれを完全に複製するのは困難だ。だがそれでも狂科学者はその能力を少しだけでも再現することに成功した。

即ち、もっとも刺激の強い記憶。人間の本能に一番近い記憶。つまり血の対象のもっとも好きなモノと嫌いなモノだ。それだけを読むことを狂科学者は可能にした。

隣の部屋。飛縁魔と飛鳥が戦っている場所。そこにあった飛鳥の血をナノマシンで摂取。血の情報を読み取りパターン化。マイクロチップに情報を埋め込み、それ自体を大きな培養管の制御装置の差し入れる。人間の成分で構成された培養管の中の水分は急速に形を作ろうと泡立ち始めた。

十メートル四方の部屋を三つの人体が飛び交う。既に壁と天井はポロボロでありカーペットはズタズタ、高級品だった家具一識は既に無数の打撃痕と斬撃痕が刻まれ原形をとどめていなかった。

飛縁魔と飛鳥は先ほどとは打って変って三次元な戦闘を開始していた。部屋の中を壁や天井を利用し縦横無尽に飛び交いながら所々で交差し攻撃を加える。だが先程と違うのはそれだけではなく、飛鳥の相手が二人だと言うことだ。

(極限まで息の合った連携・・・只でさえ隙がねえ飛縁魔の野郎の隙を更に少なくして詰めてきやがる。・・・ジリ貧、だな)

その足を止めず、常に音速に近い速度で飛び交いながら飛鳥は一瞬、思考する。弟子と師匠と言っただけあってその連携は完璧に近く、飛鳥は中々手が出せずにいた。

飛縁魔は本来、プロのプレイヤーと呼ばれる人種の中でも類を見ないほどの力任せのプレイヤーだ。莫大な力を内包している身体を動かすのではなく相手が突っ込んでくるのを利用して最大限の攻撃を撃ち込む。それが飛縁魔の戦い方である。

飛鳥自身それを分かってはいるのだが・・・

ちっ、またかよ。

これで、五度目。初めて会う掛け値なし強い拳士である飛縁魔。それを五度、追い詰めながらも飛鳥は決定打を放てずにいた。

何故か。

それは、飛縁魔の間合いにある。例えば居合いの達人が結界とも言える間合いを持つ、と言うのは聞いたことがあるだろう。飛縁魔の間合いはそれに似ている。

拳が届く間合いになったら一撃で仕留めて見せる。そんな意志が丸見えだった。隠す気もない。むしろ、曝け出している。だが。だからこそ。飛鳥は踏み込めない。あと一歩まで踏み込んで　そこから先に進めない。相手が何をしてくるか分らない以上、無闇に突っ込むの自殺行為に等しい。更に言うならば飛鳥だつて死にたくないのである。その意志が最後の一步を踏み出させなかった。

そしてその隙を的確に、精密に、切ってくるのが七人岬だ。刹那の躊躇いを見逃さず、鋭利な斬撃を繰り出す。それを飛鳥は自らの唯一の技とも言える蛇咬スネークバイトで打ち返していた。

握力二百キロと言う怪力で振り切られた右手に巻き込まれた空気が膜を作り、刀をも弾き返す防御膜が形成されていた。その衝突音はさながら金属同士がぶつかった様な音であり、そして防御膜があったとしてもその腕に斬撃による傷が残されていくのは当然のことだった。

当事者からすれば永遠にも感じる数分の交錯。一種の膠着状態を生み出していた状況が、崩れるのは一瞬だった。

何度目か分らない交錯。その直後。七人岬は飛鳥に向かって更に一

歩踏み込んだ。それに敏感に反応し蛇咬スネークバイトで弾き返した飛鳥の背中に寒気が奔る。技の発動の僅かな硬直時間。隙の隙。そこをはつきりと狙い打たれた。

ゴキツ！

「ツ！？グウツ！？？」

くぐもった呻き声を漏らしながらも動きを止めず、飛鳥は冷静に自らの体を把握する。

左肩。脱臼してやがるな・・・

ちっ、と舌打ちを一つ漏らした飛鳥はそのあとある一点を見て目を見開いた。

直木 飛縁魔が部屋の中心に立っていた。何もせずに悠然と、何もなにかのように自然と、何もなにかのように泰然と。

七人岬は依然、自分を追い続けているが飛縁魔は何もして来ない。それはもう七人岬だけで十分と言う表れなのか、それとも自分ももう満足したと言う意思表示なのか。飛鳥に分からない、が、分かることは一つある。それは

嘗めやがって・・・！

自らが軽んじ、嘗められていることだ。

直木 飛縁魔にとって目の前の少年は尊敬に値する人間だ。己がそれなり強いと言う自負はある。才能もあっただろう。だがそれが開花したのは多大な経験を積んでからだ。決して小学校に通っているような歳でここまで戦えることはなかった。

計り知れない可能性なのか。それとも、既にオレに考えつかないような経験をしているのか。

飛縁魔には分からない。そして分かったいわけでもなかった。己が立っている部屋の中心。さっきまでの交錯には飛縁魔自身冷たい汗を掻いている自覚があった。何せスピードが速すぎる。己でも気を抜いたらすぐに見失うスピードだ。飛縁魔にはだれであろうと一撃で葬れる自身があるが、さすがに飛鳥の速度は規格外だ。故に己の愛弟子である七人岬の協力によりお膳立ては整った。あとは飛鳥が自身が持ちうる最高の速度と威力で己に突っ込んでくるのを待つだけだ。賭けに近いが飛縁魔には確信があった。飛鳥は基本、冷静であるように努めているが自らが見下されることを酷く嫌っている。それならばこの挑発には必ず乗ってくる。確信が、飛縁魔にはあった。敢えて利き手であろう右手ではなく左手を狙ったのだ。己が想像する通りでなければ困る。

そして時は来た。部屋中を七人岬と壮絶な追いかけっこをしていた飛鳥が飛縁魔が立っている真正面、そこから突っ込んでくる。その右手にあらん限りの力を溜め込みながら。片腕と言うハンデを負った自暴自棄な突撃を。

積みだ、可能性。

「俺的必殺 問答無用拳」

「スネークッ  
蛇！」

タイミングはドンピシャ。大きく振りかぶつての完璧なカウンター。飛縁魔の取った迎撃方法は人体の急所、心臓を「力任せにぶん殴る」と言う極めてシンプルな物だった。

彼は力を可能性と置き換えることができるほどに知りつくしている。力の流れを知りつくす飛縁魔に小細工など必要なく、華やかさも必要なく、ただただ突貫して来る飛鳥の勢いまでも利用しての、力任せの一撃。それを心の臓にブチ込んだ。

どんな角度でも、力学的な支点さえ定めてしまえば力学的な視点などあとで考えればいい。相手が何か攻撃して来るその前にこちらの攻撃をブチ込めばいい。

故に、必殺。故の、必殺。

近頃は一撃だけで終わってしまう飛縁魔にとってこの闘争は楽しか

った。何せ、最初の一撃から確実にそれを狙っていたのだから。そのまま打ち合いを続けられたのは奇跡に近い。打ち合いを続けられたのはお互いに初撃が躲されるなど夢にも思っていなかったのだ。互いにフリーズし、同時に起動した。

下らないことだがこれが事実であり、戦闘が長引いたのはお互いに速さに拘ったからである。手数勝負など久しぶりな二人には心底楽しかったのだ。

だが、それも終わりだ。

自らの拳が直撃する寸前、飛縁魔はそう感じていた。

飛鳥の心臓に直撃した豪撃は心機能を停止させゆつくりとその体を横たわらせる。人の鼓動は、もう聞こえなかった。

筈だった。

タイミングは、ドンピシャだった。

歴戦の勇士であり、歴戦の勇姿を持つ、飛縁魔が。そう、幻視してしまっほどもに。

タイミングは、ドンピシャだった。タイミングを、外されなければ。

飛鳥の限界まで引き絞られた右手は飛縁魔には、向かわなかった。全力の攻撃を受けたのは左肩、だった。

飛鳥の（・・・）。

ゴキッ！

骨が、嵌まる音がする。怒りに歪んでいる顔は不敵な笑顔に。怒り心頭な自暴自棄の筈の一撃は、その実、恐ろしいほどにまで冷静だった。

左肩に当たった一撃は、脱臼を治し。その攻撃の衝撃は飛鳥自身の体を突き抜けず、速度が減速。前方に向かっていたはずの体はその場で垂直に回転。減速、回転した飛鳥に追従できず、「力任せにぶん殴る」筈だった拳は飛鳥の心臓どころか身体を掠ることすら、なかった。

飛縁魔の「力任せにぶん殴る」とは、深い意味もなく本当に、力任せに殴るだけである。

ただし、全力で。

全力で、振り切った手はすぐには戻せない。全力で、振り切れれば隙が出来る。全力で、振り切れればカウンターは餌食だ。

カウンターにカウンター。それも相手の全力の攻撃の勢いを利用して。それが飛鳥の取った攻撃だった。

飛縁魔の攻撃に似ているようで違う一撃。完璧にタイミングを合わせて、完全にタイミングを外された飛縁魔は、霞むような速度で、回転の勢いを利用して迫りくる右足の回し蹴りを躲す術を、持たなかった。

直木三銃士が一人。直木 七人岬は例えるならば暗殺者に近い。体を最大限に隠し、見えない攻撃を繰り返す。自主的な性格ではなく、命令を待つ。そして、命令を守るときには、どんな犠牲も厭わない。自らの命も。たとえ自分の師であっても。

飛縁魔が飛鳥の回し蹴りで倒れる少し前。飛鳥が飛縁魔に向かって砲弾の如く飛び出したその直後。七人岬は飛鳥に向かって、飛び出していた。

どちらでも、良かったのだ。直木 七人岬には。たとえ自らの師が負けようとも飛鳥が勝つたと、倒したと言う瞬間の油断を狙い。自らの師が勝つたとしても確実の飛鳥の頭を潰していた。故に、七人岬にとって飛鳥と飛縁魔の交差はこれ以上ない、チャンスであった。

飛鳥に近づいて一步。飛縁魔が壁際に吹き飛ぶのが見える。飛鳥はまだ宙に浮いている。

更に一步。飛縁魔は壁に激突し、苦悶の声を漏らす。飛鳥はまだ宙に浮いている。

そして一步。飛鳥はもうすぐ地面に降り立つ所だった。飛縁魔はこちらに何か叫ぼうと、していた。

最後の一步、射程圏内。確実に対象の息の根を 踏み出した軸足に違和感。視線を足元に向けるとそこには大量の透明な撒き菱がいつの間に、と思う間も七人岬にはない。それが飛鳥が左肩を叩いたときに零れおちたものと気づく暇もない。

一瞬の気の乱れ。その隙は、飛鳥にとって十分過ぎた。

知覚すら出来ないほどの衝撃。鳩尾に受けたそれに七人岬の意識は一寸の余地もなく刈り取られた。

飛鳥は七人岬を殴り飛ばすと、吸っていた黄色の煙草を大きく吸いこんで

咽た。

「うえげほっ!?げほっ!けほつくふっ!ゴホツゴホツ!?. . .  
ハア、ハア。王の分量間違えやがったな. . .」

息を整え、小さく悪態を吐く飛鳥に飛縁魔は立ち上がれない程のダメージを体に受けながらも、話しかけた。

「. . .君は何故. . .いや、聞いても意味のないことか」

「ああ?なんだって?」

「いや、なんでもないよ. . .ああ、それと。ここに来るまでにいたグール達は海水に弱い。出来れば船を降りる前にこの船の船底

を壊してくれないかい」

突然の飛縁魔にとって何の意味のないその言葉に、飛鳥は隠す様子もなく露骨に顔をしかめた。

「どうした？急にそんなに素直になりやがってからに」

「オレは人生損得勘定で動いてない。ただなんとなく、だ。他意はないよ」

「・・・ま、いいだろ。手前にほんの少し良心が残ってれば儲けもんだ。それに嘘でも、ただ最初からアイツらの処分方法を探すだけだしな」

治療ではなく、処分。そこに込められた意志は飛縁魔にも飛鳥自身にも分からなかった。

「とどめは、ささないのかい？」

「さして欲しいのか？」

「とんでもない」

人心地ついた飛鳥は飛縁魔に答えたあと、スタスタと部屋にあった扉ではなく、部屋の端に歩き出す。飛鳥が歩いていくそこには、飛鳥と同じくらいの年齢の少女とその肩に止まっている小さな鳥がいた。少女はダボダボの黒いコートを来ており、髪に大きなリボンをつけていた。鳥の方は少女と同じく濡れ羽色の体色をした小さな鷹だ。

「で、ここに入って来た時から感じてた視線はお前らか？」

「……（コク）」

無言で頷く少女に、飛鳥は頭をガシガシと掻いて、言った。

「なあ、アンタ。もしかしてロリコンか？」

「そんなことあるわけないだろう」

「あ、そ。ま、どうでもいいけどな」

じゃあ何で聞いた、と突っ込みたくなった飛縁魔だったが体の痛さにそれを諦めた。

「……それで、お前らの名前は？」

「……レン。こっちはフィニー」

「レンにフィニーな。どうしてこんなところにいるか、分かるか？」

自分の名前らしきモノを言った少女は肩に止まっている鳥をさしてこれまた名前らしきものを言う。名前を呼ばれると鳥がクー、と鳴いた。歳があまり変わらない筈なのにまるで自分より小さな子供に話しかけているように飛鳥が見えるのは何故だろう、と飛縁魔は思ったがやはり体の痛みに負けて何も言えなかった。

「……（フルフル）」

「……そうか。……どうすっかなあ。何か迷子っぽいし。……」

「・・・取り敢えず、連れて帰るか？」

一人で首を捻る飛鳥にレンは何も言わない。

「・・・それも後でいいか。じゃあ、少しここで待っていてくれるか？」

「・・・私が？」

「そうだ。いいか？」

「・・・(コク)」

「素直でよろしい。・・・さて、と」

笑いながらレンの頭をガシガシと撫でた飛鳥は今度こそ、入り口とは違う、研究室に続いている扉に向かう。

その途中で、壁に寄り掛かって息を整えている飛縁魔の前を通り過ぎながら飛鳥は聞いた。

「なあ、アンタ。『堕ちた剣聖 ブレイクブレイド』ってのはアンタよりも強いのか？」

「ッ。・・・君はまた・・・そんな名前、久しぶりに聞いたよ」

問われたことに僅かに顔を歪めた飛縁魔だったが、次第に呆れたような、気が抜けたようなそんな顔をした。

「そうだね　　一度だけ、戦ったことがある」

「で、アンタがここに居るってことはアンタの方が強いのか？」

「　　いや、違う。体の強度で言えばオレの方が上だっただろうがモチベーションが違ったからな　　オレが負けたよ。ここにいるのは『堕ちた剣聖　ブレイクブレイド』の主人のおかげだよ」

「主人？それはつまり、飼い犬って意味か？」

「・・・違うな。本当の意味で主人だったよ。こつゆつ世界に関わるには驚くほど優しい、ね」

優しいね、と呟きながら頭を掻く飛鳥を見ながら飛縁魔は続けた。  
何故、自分がこんな話をしているのか自分でも分からないまま。

「モチベーションと言うのはね、あるかないか、で大分違う。オレが言ってるのは戦闘そのものに対するモチベーションだ。そのモチベーションがブレイクブレイドより強固だと言うプレイヤーをオレは今まで見たことがない」

そう。当時、一匹狼だった飛縁魔が興味本位で单身挑んだ結果、その差に、圧倒的なモチベーションの差に、愕然とした。掛け値なく、愕然と。

「　　彼女は主人の為に戦う」

「・・・あ、待て。いま彼」

「そうだ、彼女。女だったよ。ブレイクブレイドは・・・そうだ、

彼女のモチベーションは主人そのものだった。それを見て、彼女に負けて」

自らの主人に降りかかる脅威を全身全霊で振り払う。その、背筋に悪寒が奔るほどの忠誠と、彼女の主人の慈愛を見て、自分は何を思ったのか。その絆を見て何を、思ったのか。

ずっと不思議に思っていた。愛弟子も、自分自身も。何故、弟子をとったのか。分け隔てなく全力で自分の技術の全てを授けたのか。

こういう、暴力が蔓延る、所謂裏の世界では自分の取得した技術を好んでひけらかすことはほとんどない、弟子など取らない。

故に、飛縁魔はこの世界では例外だった。

そして、気づいた。

ああ、なるほど。

「オレは彼女が、羨ましかったんだな」

「羨ましかった？」

首を捻る飛鳥だが、疑問は挟まない。

「そう・・・初めて他人が羨ましいと思った。オレもまた　　そういう、目で見えない何か。そういうもので繋がっている人間が欲しいと思ったんだろう。例えば、家族、仲間、友達とかね。そういう人間が欲しかったんだ」

だから弟子をとった。一匹狼であった自分が、気まぐれだと、そう  
思っ

負けたことは何度もある。だが、価値のある敗北と言えるのは、今  
気づいたのも含めて二個目、だった。自分が、弟子たちに教えてき  
たことが勝つ方法ではなく、生き残る方法ばかりを無意識に教えて  
きた、意味を。

後で、謝らなきゃなあ。

止めを刺さないとやったことを信じるなど愚の骨頂であるに違いな  
いのに、何故か飛縁魔は自然に、信じる事が出来た、飛鳥を。

「君は、不思議だな。可能性。君と彼女は大きく違う、かけ離れて  
いると言ってもいいほどののに、何故、ここまで彼女を

思い出すのか、そう言おうと思っていた飛縁魔の口は飛鳥の発した  
言葉に、止まった。

「知らねえよ、オレは。ブレイクブレイド（そいつ）じゃねえんだ  
ぞ、オレは」

「・・・それも、そうだな」

何故か焦れたように話す飛鳥とは対照的に飛縁魔は壁にその身をも  
たれさせながら薄く笑っている。

「なあ、アンタ」

「なんだ？」

「そうゆう。そうゆう、誰かの戦うってのは、誰かに、依存するってのは、墮落なのか。それとも」

「分からないよ、可能性。オレは元々そのような事を考える人間じゃない」

焦ったように問う飛鳥に飛縁魔はそう返した。奇しくも先程の問答を再演するように。

「・・・そうだったな」

トン、と。壁に体をもたれさせて飛鳥は煙を吸う。十歳に満たないその体では床に腰を付けている飛縁魔の頭と同じくらいの高さに飛鳥の頭があつたため、それを見て飛縁魔は再確認した。自分を打ち負かした存在を。

「・・・アンタとは気が合いそうだ」

「オレはそうでもないね」

正確には自分を打ち負かした存在の、小ささを。

「ああ、頼む。ヘリを一機。太平洋沖の、そうだな・・・たぶん〇〇KMくらいだ。・・・ああ、そうだ。そう。・・・頼んだぜ」

先程の話を終え、気絶してしまった飛縁魔とその弟子三人を甲板まで運び、救命ボートに乗せ、海に放した飛鳥。運がよければ助かるだろうと思いながら、よって来たグールに海水をかけてみると悲鳴を上げながら腐り落ちた。予想以上の効き目の驚きながら、飛鳥はまた先程、戦闘した部屋まで戻っていった。ちなみに、甲板を往復するときは部屋にあった長物を振り回して吹き飛ばしながら進んでいた。襲いくるグールに飛鳥は無表情でバカスカ打っていたため、錯覚の筈だが運んでいた人間全てが、冷や汗をかいているように見えしたのは気のせいだろう。

そして、飛鳥は知り合いの請負人、なんでも屋だと思えばそれでいい。とにかく、その知り合いにヘリコプターをチャーターし、いよいよ最後の部屋、に入ろうとしていた。

「・・・んじゃ、行きますか。ちよつと待ってるな」

「・・・(コク)」

頷くレンを見て、軽く笑った飛鳥は部屋の入り口ともう一つあった別の扉を蹴り破った。

「想像通り、だな」

予想通りではないのだが、と続けながら両脇に連なっている円柱状のガラスケースをその中身を見て大いに顔をしかめたため息を吐いたあと、先程からカタカタと音がする方に向かって歩き出した。

僅かな明りが広大な空間を青く照らしている。ゆっくりと歩きながら、両脇のガラスケースを見ていく飛鳥。中には多種多様な動物、人間や植物もある。動物を混ぜ合わせたようなモノもあった。

「・・・きき、クキククキキキキキ」

そして次第に聞こえた聞く者の不快感を増大させるような笑い方を聞きつけた飛鳥は底に向かって一息に奔りだした。畏の類がないことは既に分かっているのだ。

「・・・そこまでだ。手を動かすのをやめろ」

「クキキ」

またしても先程の部屋にあったナイフを首に突き付けながら飛鳥は喋る。命を握られている不気味に笑う男に選択肢はないはずにも関わらず、やめる気配はない。

「・・・おい」

「クキキ」

まだ、止まらない。

「おい」

「クキキ」

止まらない。

「おい！」

「クキキ」

止まらない。

「・・・クソが！」

次第に激しくなった問答に痺れを切らしたのか、飛鳥は軽く男を殴る。それを受けて床に倒れた男は、それでもまだ、虚空に指を動かしていた。

「・・・あの方に・・・告は終わった・・・で私は幹・・・  
しても・・・吸血鬼とは素晴ら・・・」

「・・・クソ」

瞳孔が開き、よだれを垂らしながら喋り続ける男は明らかに正気を失っていた。それを見た悪態を吐いた飛鳥は一つため息をすすると持っていたナイフを男の頭に突き刺し、その生命を停止させた。

「・・・はあ。ブツは、っと」

完全に動きを止めた男を見て再度ため息を吐いた飛鳥は辺りを見回す。今回の奪還のブツである「吸血鬼の血液」を探すためだ。そしてそれは割と早く見つかった。コンソールのすぐ近く、ガラスケースに入れられている輸血用パック。三つあったようだが既に一つ開けられていた。

それを見つければ早く元々入れてあっただろう、トランクに仕舞い飛鳥は立ち上がる。そしてレンの居た部屋まで戻ろうとするなか、飛鳥は思考を開始する。

守り屋と言う人間が居た以上、ブツはあることが確定だった。そして明らかな門番の配置だった。ならばもう何人かは残っているだろう、と思つて進んだ結果、一人しかおらず。さらに最後の一人は狂い過ぎており話が聞ける状態ではなく、グールばかりの船内で唯一意識があつた飛縁魔達はどこにいるか分らず、この強奪を画策した組織の情報は聞けず。後の祭り、だった。

またしてもため息をつきながら、飛鳥は部屋に着くと床にトランクを置き、静かに右手を構える。

空気が、張り詰めた。

「今こそ汝が右手に その呪わしき命運尽き果てるまで 高き銀河より降りたもう蛇遣い座を宿すものなり アスクレピオス されば我は求め訴えたり 喰らえ その毒蛇の牙を以て」

船の心臓部とも言える船底を飛鳥の攻撃が、ぶち抜いた。

船が海に沈んでいくのが見える。風とプロペラが耳に送る爆音を感じる。あのあとオレは船底をぶち抜いたあとレンを背負い、一気に船内を駆けあがり丁度良く来たへりに乗り込んだ。グールはまたも長物で吹き飛ばしながら進んだ。正直、雑魚を倒して経験知稼ぎしてるRPGの主人公の気分だった。そろそろ、レベルが上がってる頃だろ。

「相変わらず無茶しますね」。船一隻沈没させるとか本当に貴方人間ですか」

「うるせえ」

「ぐえっ」

操縦席にいた男を殴る。いつも一言多いんだよ、手前は。操縦の腕

は一級品なのによ。

「分かりましたよ。まったく。ぼうりょくはんた〜い」

「いいから行け」

「あらほらさっさ〜」

ふざけた声を出しながらへりを操縦しているのはノエル。金髪にピアスに着崩したスーツとホストの様な格好をしているお気楽な人間だ。これでそこいらのヤンキーが束になっても適わないのだから人はみかけによらないもんだ。それにしても情報を得れなかったのは痛かった。頭が痛い。

「・・・」

「・・・はあ」

そういえば、もう一つあったな頭痛の種。

隣に座る少女を見て飛鳥は再びため息を吐いた。

## 第六話（後書き）

時間かかってすみませんでした。間違い多いかもです。そして駄文。感想ご指摘待ってます。

## 第七話（前書き）

どうしようか、これからの展開。勢いでやったし・・・これで今年最後の更新です。たぶん、ぜったい。

## 第七話

### 第七話

A c t

地方都市 海鳴市 月村邸

あのと、ノエルが乗って来たヘリを駆りながら海鳴市に戻った飛鳥は少し頭を悩ませていた。一つは船の中で拾った一人と一匹。もう一つは……

「……前はまだ、ベル 407だった気がするんだがなあ……？どうやってこのヘリ手に入れたんだ、アメリカ海兵隊のだろこの攻撃ヘリ？」

「やったなあ、聞くのは野暮つてもんでしよう！」

「野暮なのか？」

「野暮ですね」

そう、ノエルが乗って来た攻撃ヘリはAH-1W、つまりアメリカ海兵隊が導入している攻撃ヘリだ。傑作機であるAH-1 コブラの発展型であり今はそれを更に発展させたAH-1Z と言う物もある。これの説明自体にあまり意味はないのだが……つまり飛鳥が言いたいのは早い話がいくら最新機ではなくとも一個人が持つてるものじゃない、と言うことなのだ。

「……………まあ、いい。オレにゃあ関係ねえし」

「それでいいッス。知らぬが仏、って言う言葉もありますし!」

「……………無知は罪、とも言うぜ」

「気にしたら負けっス」

「……………ああ、そうかい」

はあ、と珍しくため息を吐いた飛鳥はおもむろに懷に手を入れると煙草のケースと携帯電話を取り出した。手の中にある携帯電話を一瞥すると、ケースを片手で振り煙草を取り出すと口に啣える。そして火をつけながらもう一方の携帯電話を操作し始め、いくらかキーを叩いたあと耳に当てた。

「……………ん。こちらエリオ、ブツは奪り還した。これから戻るが……詳細の報告は明日でいいか？」

「……………分かりました。それで構いません。……………くれぐれもそのまま蒸発してしまわないように」

飛鳥の電話の相手はノエル（いや、ヘリのパイロット違っよ）だった。違和感なくエリオの名前を使いながら飛鳥は依頼の終了を報告する。少しの沈黙が続く、電話の向こうから僅かに安堵の気配が伝わってくる。

「分かっている。依頼はこなすさ」

ブツ、ツーツー。

電話が切れる音がし、飛鳥は携帯をしまつと、静かに煙を吐き出した。

翌朝、飛鳥は依頼されたブツをトランクケースに入れたまま片手に持ち、一週間ぶりに月村邸の前に立っていた。

煙草を吹かしながらチャイムを鳴らした飛鳥は自分の隣に目をやる。そこには船の中で来ていたを服を着替え、身なりを整えたレンとその方に止まる小鳥のフィニーがいた。

へりによって自宅近くにレンとフィニーを伴って飛び下りた（誤字

に問わず）飛鳥は、それに顔色一つ変えないレン辟易しながらもLDKの自宅のカギを開けて中に入りシャワーで汗を流したあとソファで寝た。ちなみにレンはベッドで寝させ、フィニーしばらく家の中を飛び交っていたが居心地のいい所を本棚と定めたのか、羽を休め始めていた。

「……ん、あいたな。じゃ、まあ……取り敢えず付いてこい」

「……（コク）」

「……」

門が開き、中に入ることを許可されたのを確認した飛鳥はレンにそう言った。それにレンは頷くことで答え、静かに飛鳥の手を握る。それに僅かに驚いた飛鳥だが握られた手に目を向け、そのあとレンを見るとまあいいか、と思い直しレンの手を引きながら月村邸の中に入っていった。

「あら、一週間で子持ちになったの？」「男子三日会わざれば刮目して見よ。」「って言うのは本当だったのね」

前にも通された客間につくなり飛鳥にかけられたのは原典は三国志だと思われる慣用句の類だった。

「・・・Wurden Sie nicht verrckt (貴方は頭がおかしくなったのではないのですか)?」

「Es ist unhflich. Ich bezahle kein Geld (失礼ね。お金払わないわよ)」

思わずドイツ語で話す飛鳥に余裕綽々な態度を崩さない忍。何故こんなに余裕があるのかと言うと昨日の内に奪還の連絡が入ったこともあるが、段々と飛鳥の性格を把握し始めたからだ。断じてお人よしなどではないが無闇に暴力を振るう人間ではなく、態度は悪いが仕事に対しては誠実な精神で対応する。飛鳥もおそらく気づいていた。ただろう監視の人間の報告から忍はそう推測していた。

「ならオレは今すぐここから出ていくな」

そう言って出口に向かう飛鳥を忍はコロコロ笑いながら引きとめる。

「冗談よ。何も本気にすることもないでしょう」

「・・・へい」

・・・まあ、監視自体ハングライダーで飛び出す前だけなので直木三銃士の件がバレたら飛鳥は大目玉を食らうだろうが。

そのあと詳細な報告をし終えた飛鳥は出された紅茶に口をつけながら忍は話し出した。

「・・・まずは、ご苦労様でした。正直、依頼から六日間何もしなかったときはどうしてやろうかと思っただわ」

「やっぱりあの、お粗末な監視は手前らの仕業だったか。・・・まあ、最初の依頼で信用できないのはわかるがな」

さりげなく監視していたことをバラす忍に、予想していたのか至って普通に返事を返す飛鳥。僅かにピリピリとした雰囲気流れるが飛鳥は飛鳥でその事について納得はしていたのか、空気を少し震わせた後は何も言わない。通常、守り屋、奪い屋、プロのプレイヤーなどの業界の人間を雇う上では一定以上の信用が必要になる。依頼する側としても依頼を受ける側の人間が人としてある程度の常識がないと困るのだ。それは組織に対してでもあるし長い時間をかけて得た個人の実績に対してでもある。だが今回は実績で依頼を出すのを判断したし、現在を以って名をあげる途中の人間が業界の信頼を失うような真似をすることはないだろうと言うある種、樂觀視した背景が忍にあった故に一族の長としてもクライアントとしても心配は絶えなかったのだ。月村の伝手を使い手を回したのだった。

「お粗末って・・・。私の中じゃ最高位の筈だったんだけど・・・」

「随分安い最高位だな。ま、オレに場所を悟らせないだけでも大し

たもんだが」

「……ああ、そう」

実際のこと、忍がその監視を受けたとき全く分からなかったことがある。身体能力的にも軽く人間を凌駕する忍が、だ。耳にも音がほとんど入らなかったし、目で分かるような印もなかった。人が発している空気の澱みとも言えるモノも感じなかった。まるで見えない霞のようだったのだ。霞でもまだ見えてるぶん、そちらの方がいい。その監視に気づくだけでも忍からしてみれば仰天モノだ。それにしただって飛鳥は監視されていることに気づいたくらいだ。決して、誰が何処で監視していたのか（……）を気づいていたわけじゃない。

「……それにしても、どうしたんだ高町 恭也？オレをさっきから穴があくほど見つめやがって……悪いがオレにそっちの趣味はないぞ？」

「オレにもない！見ていたのは認めるが決して疾しい気持ちがあったわけでもない！」

「必死に否定する所がまた怪しいな」

「恭也……」

「忍までそんな目で見るな！違うって言うてるだろ！？」

口元を押さえ涙をにじませた目で恭也を見る忍に思わず吼える恭也。だが飛鳥は見逃していなかった。忍の口元にくつきりと笑みが浮かんでいることを。からかっているなと確信した飛鳥は恋人公認のよ

うなのでそれに便乗することにした。

「そっちじゃない・・・？つうことは・・・まさか高町 恭也、お前まさかシヨタコンなのか？」

「恭也・・・」

「酷くなった！？わざと言ってるよなお前！？それと忍、絶対笑ってるだろ！？」

「あら、バレてる？」

まさしくけるっ、とした顔をして言う忍に飛鳥は僅かに飛鳥は苦笑した。

「・・・で、結局何なんだ、高町 恭也？」

「・・・いや、何でもない。それと恭也でいい。・・・長い、付き合いになりそうだしな」

「なに？」

恭也は長く沈黙していたが、ふと、諦めたように被りをふるとため息を吐きそう言った。

長い付き合い。恭也はそう言った。飛鳥はそれに大いに疑問を覚えた。依頼を受けた人間と依頼をした人間はすぐに離れる。長い付き合い、平たく言えばお得意さんの関係になること。または依頼人に惚れこみそのまま付き人になった人間もいることにはいる。だがそれは極少数だ。安全性や利便性においても依頼した人間が依頼を受けた人間と長く一緒にいることは珍しい。それ故に長い付き合いと言うのは皆無と言っていい。

飛鳥としては名前の分も問いただしたい所ではあったが、長い付き合いと言う部分に疑問を覚えたので間もなくすぐに二人に問いただした。

「長い付き合いってのはどういう意味だ？」

「あ、そうそう 貴方にもう一個依頼をお願いしたいのよ」

「依頼なあ？」

「そ、依頼」

顔を顰める飛鳥に、忍は軽い感じで返した。

紅茶を淹れ直して一息ついていた三人。と言っても優雅に紅茶を飲みながら一息ついていたのは忍だけであった。恭也はと言えば飛鳥に時々視線をむけ、外したと思うと黙して唸り始める。飛鳥はと言えば、「ちよっと待ってね」と忍に言われたあと苛々しながら続き

を待っていた。恭也の視線にも気づいていたが少々心当たりがありそれに関しては我関せずを貫き通していた。

「・・・さてと。それじゃ、説明するわね」

「・・・早めに頼むな。コーヒー飲みたいんだオレは」

お金がかかっているだろう豪華なイスに座り、足を揺らし肘をテーブルの上につきながらブスツとした顔で頷く飛鳥。コーヒー中毒である飛鳥としては三時間に一杯は飲んでおきたいのだが依頼があるとしても出来ず、半日で妥協することが多い。もっとも長期の依頼になるとそれも出来ず苛々することは多い。もっともそれで依頼をいい加減にはしないのではあるが。

「分かったわ。貴方を怒らせると怖そうだし」

上品にティーカップをソーサーの置くと軽い笑みを浮かべながら死ぬ部は話し出した。

「今回の件。私たち「夜の一族」を狙った犯行であることは貴方の報告で完璧になりました。楽観的な可能性として莫大な予算を掻き集めて研究しているから重大な研究成果の類として盗まれた可能性もあったのだけれど、船の中で専門の機具を用意して研究をしていたとなると私たちが吸血鬼であることは既にバレているのはほぼ間違いないようです。それを知っている機関は知る限り一つのみですイギリスの私たちの様な血族を研究、捜査するが機関があるにはあるんだけど其処との話はもうついているのよ。既にサンプルとして血液を渡している以上、それはないと思っいいい」

「私たちの血族は各地に散らばっています。名を変え姿を変え、受け継いできた血をどうにかしようと奮起しています。……まあ、繋がりは薄いうえお互い嫌いあっているため既にどこにいるのかも私たちにもわかりません。ですが、私たち「月村」ほど表だって居を構えているのは他には存在しません。故に今回狙われたのだ、とも推測しています」

「私には恭也がと言うボディガードがいるうえ、家の外に出ることはこれからそう多くしないつもりです。ですが、私にも家族がいます。私の妹で「月村」すずか、と言うのだけれど……もう貴方は知っているのかもね、その反応を見る限り」

「人から遠いとは言え、人並みの幸せはあつていいと私は思っています。だから私はすずかに来年にはごく普通に学校に通ってもらいたいと思っています。本当に身を案じるべきならば、家から出さないのが最良だと分かっていますが、すずかとしても、私としても、それは承服しかねます」

「学校と言う団体である以上、危険は少なくなるだろうことは予想できます。友人が出来れば更に危険は減ると見ていいでしょう。ですが、心配は拭えません。……そこで護衛をつけたい、と思っています」

「学校は私立聖洋大付属小学校。手続き及び資金はこちらで負担します。エリオ君には学校に入っただけの護衛を依頼します」

m  
i  
s  
s  
i  
o  
n

学校への侵入

「月村」  
すずかの護衛

## 第七話（後書き）

今年最後の更新です。次回には色々説明を感想ご指摘待ってます。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n4881x/>

---

魔法少女リリカルなのは ～転生者は蛇遣い～

2011年12月31日01時51分発行